

九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Studies in Chinese Literature

<http://hdl.handle.net/2324/9840>

出版情報：中国文学論集. 4, 1974-05-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：





演 一 衛 先 生 近 影

演 一 術 教 授 略 歴

- 明治四十年 九月 二 日 大阪市東区今橋三丁目に生る
- 昭和二年 三月 四 日 大阪府立高津中学校卒業
- 昭和五年 三月 十 日 大阪府立浪速高等学校卒業
- 昭和八年 三月 三十 日 京都帝国大学文学部支那語支那文学専攻卒業
- 昭和九年 三月 三十一 日 願により文学部副手の囑託を解かる（外国留学のため）
- 昭和九年 五月 十三 日 京都帝国大学派遣外務省文化事業部留学生として二ヶ年北京留学
- 昭和十二年 三月 三十 日 兵庫県灘中学校教諭
- 昭和十三年 三月 三十 日 松山高商商業学校教授
- 昭和二十四年 三月 三十一 日 松山商科大学教授、兼て松山経済専門学校教授
- 昭和二十四年 八月 三十一 日 九州大学助教（教養部）
- 昭和二十八年 三月 一 日 九州大学教授
- 昭和二十八年 四月 一 日 文学部講師併任、九州大学大学院授業担当
- 昭和三十年 九月 一 日 教養部審議会委員（昭和三十一年九月三十日まで）
- 昭和三十一年 七月 一 日 島根大学文理学部講師（昭和三十一年九月三十日まで）
- 昭和三十六年 五月 一 日 京都大学文学部講師（昭和三十七年三月三十一日まで）
- 昭和三十七年 二月 七 日 文学博士の学位受領
- 昭和三十七年十一月二十四 日 二十年精勤表彰
- 昭和四十年 四月 十四 日 佐賀大学教養部講師（昭和四十六年三月三十一日まで）
- 昭和四十二年十一月二十三 日 三十年精勤表彰
- 昭和四十四年 四月 一 日 九州大学附属図書館教養部分館長
- 昭和四十八年 三月 三十一 日 三十六年精勤表彰
- 昭和四十八年 四月 一 日 停年により退職

濱 一 衛 教 授 研 究 業 績
著 書 ・ 訳 書

- 北平的中国戲
支那芝居の話
琵琶記(全訳)全四十四幕(中国古典文学全集第三十三卷)
日本芸能の源流
拜月亭記(全訳)全四十幕(中国古典文学大系第五十二卷)
- 秋 豊 園
弘 文 堂
平 凡 社
角 川 書 店
平 凡 社
- 昭和十一年十二月十日
昭和十九年三月三十日
昭和三十四年十一月二十六日
昭和四十三年三月三十日
昭和四十五年十一月五日

論 文

- 最近に於ける北崑の変遷
平戲考
北京に於ける梆子腔について
東京並びに上海に於ける文明戲について
譚鑫培
皮黄の成立
半新半旧劇の変遷
春柳社の黒奴籲天録
臉譜源流
長崎の中国劇
唐人踊について
臉譜と隈取
- 支 那 学 第十卷第三号
松山高商論集 第四号
支 那 学 第十卷第四号
松山高商論集 第五号
中華名家言行録所収 弘文堂
松山商科大学創立記念論文集
文 学 論 輯 第一号
日本中国学会報 第五号
東方学論集 第一
文 学 論 輯 第二号
文 学 論 輯 第三号
日本中国学会報 第七号
- 昭和十六年
昭和十七年
昭和十七年
昭和十八年
昭和二十二年
昭和二十四年
昭和二十七年
昭和二十八年
昭和二十九年
昭和二十九年
昭和三十年
昭和三十年

梁山伯と祝英台	中国文芸座談会ノ一ト第五号	昭和三十年
南崑の変遷	文学論輯 第四号	昭和三十一年
日中輕業の展相	文学論輯 第五号	昭和三十二年
伎楽源流考	中国文学報 第九冊	昭和三十三年
舞台の馬について	文学論輯 第六号	昭和三十四年
角觥百戲について	文学論輯 第七号	昭和三十五年
勾欄と勸進棧敷	文学論輯 第八号	昭和三十六年
四声猿	中国の名著 所収 勁草書房	昭和三十六年
中国劇の脚色について	文学論輯 第九号	昭和三十七年
中国の女優について	文学論輯 第十号	昭和三十八年
北京の劇場	文学論輯 第十一号	昭和三十九年
文献通考に見る唐代の散樂百戲について	九州中国学会報 第十卷	昭和三十九年
相公について	日加田博士還曆記念論文集	昭和三十九年
明清樂覚え書 其の一 明樂	文学論輯 第十二号	昭和四十年
明清樂覚え書 其の二 清樂一	文学論輯 第十三号	昭和四十一年
明清樂覚え書 其の三 清樂二	文学論輯 第十四号	昭和四十二年
唐の傀儡戲とくぐつ	吉川博士退休記念論文集所収	昭和四十三年
傀儡戲の起源と今日の木偶劇	文学論輯 第十五号	昭和四十三年
舞台の基盤巨割りについて	文学論輯 第十六号	昭和四十四年
TAKEJUMA	ACTA ASIATICA 17	1969
竹馬について—日本と中国との—	文学論輯 第十七号	昭和四十五年
中国劇の仮面	文学論輯 第十八号	昭和四十六年
京劇俳優の名前について	文学論輯 第十九号	昭和四十七年
日本における京劇	中国文学論集 第四号	昭和四十八年
中国戯曲劇種一覽稿	文学論輯 第二十号	昭和四十八年

浜さんのこと

目加田 誠

戦後、大学の制度が変り、九大にも教養部が設けられることになり、中国語の教官の銓考を一任されて、当時松山に居られた浜さんと、京都に居られた那須さんをお迎えすることにした。ところが急に中国語の教官の定員が二人から一人に削られたので、当時教養部長だった干潟教授に食ってかかり、干潟さんも頭を抱えこんで、とうとう定員二人に復活してもらい、無事にお二人を迎えたといういきさつがあった。考えてみるとあの頃は、私も若かったし、そうしてお迎えした先生方もお若かった。それから二十何年、こんど浜さんが停年退職なさるといふ。私はもう退職して久しい。まことに歳月は馳け足の如く過ぎ去ってゆくものだ。私が浜さんと識り合つたのは昭和十年十一月の頃、北京留学中のことで、浜さんは私より半年くらいおそく北京に来られた。私に京都の小川環樹さんと同じ宿にいた関係で、京大出身の浜さんとも親しくなつたのである。後に私は西城の受璧胡同の銭稻孫先生の家に居り、浜さんは八道湾の周作人先生の家に住まれてお互いに近かつたから、始終往き来していた。

浜さんは北京で芝居を観るのがその研究の上の大事な仕事だつたから、実によく戯場に通われた。後に京戯について、写真入りの美しい書物を出されたが、それは実に楽しい本であつた。浜さんは芝居と来たら、中国の芝居でも日本の歌舞伎でも、しんそこの好きなのだ。その点私も負けずに好きなので、会つと演劇の話になる。北京に居た時、大阪の雁次郎が亡くなつた、といつて悄然として訪ねて来られた浜さんの様子が印象深い。

しかし、面白いことに浜さんは、日本の芝居でも中国の芝居でも、いやそのほか何事にまれ、世に第一流と言われるものよりも、第二流のものに深い愛着を持たれる、といふことである。その頃で言へば羽左・梅幸・菊・吉というよりも、浅草の緞帳芝居に心を引かれるといふ風であつた。この二流好み、はいつたい何に基因するのだろうか。歌舞伎座の芝居より小芝居の方がコクがある、という見方もあると思うけれども、もっと肝要な点は、浜さんという人は、あらゆる権威ぶつたものに対して恐ろしく反駁を感じるのだ。そしてその反駁はいつも皮肉と茶化すことによつて現わされる。

それは浜さんの頭がよすぎるのと、もう一つは、大阪という土地柄が、江戸時代以来持っている特質に通ずるものがあるのではなからうか。なにしろ浜さんは大阪の町のまん中に生れ育った人である。都会人らしい敏感さと気の弱さで、なんでもちよつと斜に眺めてほくそ笑む、といったところがある。

浜さんの話上手は誰も知るところだが、戦争中、浜さんの乗っている輸送船が魚雷に追いかけられたときの、スリルに満ちた話など、なんと聞いても真にせまる。浜さん一流の話術で、聞く者はゲラゲラ笑いながら、その実すさまじい感動を与えられるのだ。写実の妙というべきだろう。

浜さんは実に即物的な合理主義者である。その姿勢は北京時代のお若い時から今日まで少しも変らぬ。浜さんの研究は「日本芸能の源流」という大著になったが、その研究は実にたんねんに、いわば足をもつて蒐集した膨大な資料の上に築かれる。あるとき私は「浜さんの研究は、まるで刑事が悪漢の足どりを求めて、どこどこまでも追いかんで行くようだ」と言ったことがあるが、そういう時の浜さんの飽くこと知らぬ、そしていかにも楽しそうな様子ときたら、まったく真似のできぬものである。こうして浜さんは、その研究の上から、全く学界において、ユニークな存在となられた。「日本芸能の源流」は、学界に大きく貢献しているが、出版部数が少なかったのか、今日なかなか手に入れにくく、あつても恐ろしく高価なものになっているそうで、若い人がこぼしているのを聞いている。

このたび停年になられたら、今後は、近頃の大学紛事の、やり切れない世界から離れて、御自分の好きな研究を、ひたすら続けてゆかれるに違いない。ますます御健康を祈る。